

<特集論文>武者小路実篤 『その妹』 に就いて

小峰, 道雄 / コミネ, ミチオ

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

49

(開始ページ / Start Page)

62

(終了ページ / End Page)

70

(発行年 / Year)

1994-03-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019726>

武者小路実篤

『その妹』に就いて

小 峰 道 雄

はじめに

『その妹』は一九一四年十二月三十一日に執筆され始め、翌一五年二月四日に脱稿。「白樺」(第六卷第三号・同年三月一日)に一頁から一五〇頁までの一五〇頁に渡って掲載された五幕構成の戯曲である。実篤が二十九歳の時の作品である。

実篤は執筆の動機について『その妹』を発表した同月の「白樺」の『六号雑記』の中でこのように述べている。

元より十年程前に演説した盲目から得たヒントは殆ど何時のまにか消えて、現在自分が感じてゐる、いろ／＼の实感がそれにむすびついてしまった。盲目とその妹をあゝ云ふ境遇におくと自分の今のリズムは二人をあすこに流れつかすのである。

『その妹』には「現在自分が感じてゐる、いろ／＼の实感」が廣

次と静子の兄妹を取り巻く「境遇」となって表現されている。『その妹』に見られる実篤の实感は何以下の四点に分けることができる。一九一四年七月に始まる世界大戦に就いて、金権社会がもたらす不自由さに就いて、恋愛感情を含む男女関係に就いて、「自己を生かす」人々の連帯に就いて、の四点である。そして、その境遇の中から出てくる「人の真価」を表現しようとしている。実篤はこの「境遇」におかれた人々を川の水の流れを見るようにして観察し、それを描いている。しかし、実篤はただ眺めているのではない。実篤は悲惨な境遇に陥る原因とその境遇を乗り越えようとする人々の生き様をしっかりと観察し、苦悩する人々を「出来ることなら救ってやりたい」と、泣きながら書いたのである。本論では、四点の境遇のうち、二点を「反戦思想に就いて」「金権社会に就いて」として章立てし、あとの二点を作品の構造との関係で述べ、更に、この作品を支える実篤の思想を明らかにしていきたい。

また、一九一六年一月の「文章世界」(十一卷二号)に『二十一歳の廣次』という一幕物の戯曲が発表された。この作品では『その

妹』に遡ること七年前の状況が描かれている。時制的には前後することになるが、『その妹』で張られていた伏線を七年前に遡ることでも明らかにし、更に『その妹』の世界を膨らませようという意図があったのだと思う。本論では発表順序を敢えて無視し、『その妹』の七年前には『二十一歳の廣次』があったという考え方をしたいと思う。

一、反戦思想に就いて

第一章では、作品に見える反戦思想、国家批判を廣次の演説部分や徴兵制度に対する態度から明らかにし、周辺作品にも触れながら、その思想を深めていきたい。

『二十一歳の廣次』では、廣次が翌月の十三日に徴兵される通知を受けた日のことが描かれている。徴兵について廣次は次のように考える。

一たい僕は徴兵制度と云ふものにたいして君よりは冷淡だった。今の世ではそんなものも仕方がないものだと思つてゐた。随分とられると困る人でも、又困る時でも、國家がその人をとるのは今のところやむを得ないと思つてゐた。だから僕は自分がとられても別に不平は云はないつもりだ。しかし今はずるぶん大事な時だけに三年畫がかけないことは少したまらないとも思つてゐる。

廣次は徴兵を「やむを得ない」ものとして煮え切らないままに受け入れている。徴兵を肯定して戦争協力することはできないが、徴

兵を否定する以上は政府に対して生命をかけて反抗しなければならぬ。しかし、生命を賭けて反抗すると、絵を描くことはできなくなる。そこで、廣次は生きて絵を描く方が自分としては当然だとする。何故なら廣次にとって絵を描くことは「自己を生かす」ことであるからである。（「自己を生かす」については後に譲る）その結果、廣次は盲目になるのであるが、それを単に國家の所為とはしない。自分が反戦の気持ちを持ちながらも徴兵にとられたことに責任があると考える。だからこそ、今の自分なりに「自己を生かす」とを考へるのである。しかし、國家の戦争責任がなくなるわけではない。廣次は戦争に関する國家批判をこう展開する。

私は大の非戦論者でした。人を殺すことは嫌いな男です、又人に殺されることはこの上なく嫌いな男です、私は國家が戦争をしたことにも不服だったので、私は友とその話をしてゐました。

（一幕・廣次）

廣次の反戦思想の根底に根ざしているものは、「人に殺されることとはこの上なく嫌いな」ことである。廣次が徴兵を拒否しなかったのも、それが自分の生命に危険があったからであるが、戦争に反対するのも同様に自分の生命を自分のものとし続けられないこと、更に「自己を生かす」せないことに、最大の理由がある。この箇所にかに國家批判が強くあらわれているかは、それから二十四年後の政府が証明している。一九三九年四月一四日『その妹』が削除処分を受けるのである。

この削除部分の結果、岩波文庫版『その妹』の十三頁から十六頁

の二枚が切り取られることになる。この四頁には先に引用した部分を含む廣次が話し静子が筆記する場面の全てが含まれている。この部分が切り取られたままでは作品が繋がらなくなってしまうので、第七刷以降、この廣次の話す部分が書き換えられることになる。しかし、その書き換えられた箇所には先の引用のような国家批判は見当らない。廣次が画家として有望な青年であったこと、戦争にとられて盲目になったこと、廣次が落胆していることがあっさりと触れられているにとどまっている。

国家の削除処分に屈したからといって削除前の実篤の反戦思想が消えるわけではない。実篤は『又戦争か』という論文を「エゴ」(二巻八号・一九一四年九月一日)に発表するが、風俗壊乱で発行禁止になる。この中で実篤は戦争断固反対の立場はとらないが、戦争を肯定することはない。それが発行禁止の対象となったのではないかと考えた。

自分は自分の死を恐れる、自分の妻の敵によつて弄られることを恐れる、自分に娘があれば、娘の弄られることを恐れる、親子兄弟の殺されることを恐れる。其処までゆけば自分は剣をとるかも知れない。だがそれだけ戦争の悲惨を感じ、戦争に反対したい。自分は外国人の生命も、貞操を穢されることを喜ばない人間だから。

自分は国家的エゴイストの一人ではない、世界的人間の一人である。自分の仕事はそれを自分に強いる。自分の感情は其処まで行つてゐる。

実篤は全くの個人の立場からと「世界的人間」の立場から戦争に反対する。個人の立場とは自分を戦争の被害者に設定したものである。実篤の創作の態度は自分の身に引き付けて想像力を精一杯に働かせ、そこで得た実感を描くことにあるが、ここでも実篤は自分が戦争の被害者になったらと想像し悲惨さを感じていく。「だから戦争に反対する」というよりは「だから戦争は嫌いだ」という感情的なもの強い。また「世界的人間」とは所謂コスモポリタンのことである。実篤は自分を日本という国家の範疇に含まれた個人に規定せず、国家の枠を越えて世界の人々と直接に対峙することのできる個人と考える。そう考えた時に、日本という国家が戦争をすることは国家の利益のみを求める国家的エゴイストとしての行為であり、コスモポリタニズムの立場をとる限り、戦争を肯定する必要はないとするのである。

廣次の反戦思想は「個人の立場」に立脚している。「自分が戦争の被害者になってしまったら」という想像が、廣次という人物を通してより鮮明に実像となって現われる。そして、廣次は画家には致命傷となる盲目になりながらも、新たな「自己を生かす」手段に挑戦し、反戦思想を持ち、国家批判を行っていく。そこにあるのは、ひとつの苦難を乗り越え力強く生きていく廣次の姿であった。

二、金権社会に就いて

第二章では、静子と栢川三郎の結婚話を扱いながら、金持ちが强者となる社会構造の本質を明らかにしていきたい。また、金権社会の中でいかに生きるべきか、という問題を西島の言う「本當の道」

という言葉を手がかりに「人の真価」について考えていきたい。

廣次と静子は両親を亡くし、故郷を出て叔父の家に居候する。叔父は相川の会社に勤めているが、さほどの働きがあるわけではない。四人の関係を簡単にまとめると金の力の強いものへの居候となる。この関係の中で相川は静子を叔父の持ち物のように扱い、物を取り上げるように静子と息子の結婚を決め、他人の人生を蹂躪する。相川がこのような権力を振り回せるのは、財産家や資本家といった金の力を持つ者の前に無条件に跪かずかざるを得ない仕組み、つまり金権社会が罷り通っているからである。しかし、静子はその仕組みへの抵抗を決意する。

私金で自由になると思っている人が出れば出る程面白いと思ひますわ。何時か西島さんがおつしやつたやうに金で自由にならない女のゐることを知らせてやりたいのですよ。(第三幕・静子)

この言葉は「妾にはならない」という決意ではあるが「三郎の妻にはならない」という決意ともとれる。「金で自由になると思っている人」は妾にしようという人だけではない。相川のように結婚させようとする人も本質的には変わらない。ここで静子は金権社会を批判し、それに立ちむかう決然とした態度を示すのである。

実篤は『その妹』の執筆の直前の一九一四年十二月に、志賀直哉の妻になる勘解由小路康子の先夫の子である喜久子を養女にもらい、どのように育てようかと考える。

僕は娘を教育し、男の性質を解剖して見せるけれど、それ以上は

交渉はしない心算だ。いやな男にひつかゝるやうな奴ならひつかゝつてもかまわない方針をとる心算だ。しかしその男にすてられたり、その男のわるい処に気がついたりして帰ってくる時は、せめない心算だ。さうして弱点をとられることによつて一生の自由を失ふやうな目にはさせない心算だ。しかしバーデンの価値の-high ことは充分に知らせたいと思つてゐる。性慾に対する羞恥心は一生をたくすことが出来る男だと思ふものゝ手によつてのみ、失なはしたいと思つてゐる。

(『雑談』「白樺」六卷一号・一九一五年一月一日)

実篤は処女の価値を重んじている。処女を捨てさせることのできるのは、一生を一緒に生きると決めた男性に限られるものとしている。そして実篤は男性を見極められるように教育するといひ、学習が不十分で失敗した場合には親もとに帰ってきなさいと言ふ。しかし、静子はそうはいかない。元々相川三郎は道楽者で精神のまるつきり生きていない不良青年である、と分かっている。学習しなくとも拒否したい男性である。ところが、この結婚に静子の意志は全く反映されない。叔父と叔母は家の繁栄のために、静子を人身供養として相川三郎の妻にしたいと考え、相川の家で静子と暮らしていき、風呂に入れ、体のいい体格検査を行い、三郎に裸体を見せ、策略通りに事を運んだのである。そして、下調べを済ませた相川は静子を気に入り、結婚に乗り気になったのであろう。相川が静子を三郎の妻にしたがっているのは相川家の存続及び繁栄のためではなく、静子という美しい娘を三郎の性欲のはけ口にしたからではないだろうか。その結果、静子の処女を奪うことが結婚を名目にジャスチファ

イされてしまうのである。勿論、奪われるのは処女だけではない。静子は自分の意志で生きていく権利さえも奪われ、全く相川三郎の所有するものにまでなりかねないのである。静子はその代わりに得るのは衣食住には不自由のない暮らしでしかない。金権社会の基盤に乗った結婚の本質は、先に挙げた静子の金権社会への批判をもともせず、静子の生きる権利までも蹂躪するものだったのである。

西島は相川の金の力に対抗しようとするが、それは最初から無理なことだと分かっていたことである。それに金権社会の中で勢力を持つことは最終的な勝利ではないのである。その勝利とは金を得るための生活ではなく、精神的な生活、つまり「自己を生かす」生活における成功である。では「自己を生かす」とはどういうことなのだろうか。

自分は美を愛する、生命を愛する、芸術を愛し、思想を愛する。しかしそれは自我を愛するからである、自我を大きくしたいからである、自我を生かしたいからである、生れ甲斐あらしめたいからである。

（『自分の筆でする仕事』「白樺」二巻三号・一九一〇年三月一日）

すべての問題が自己に帰らなければならない。しかし問題はそれから先である。如何に自己を生かしてゆくか、如何に自己を生かき甲斐あらしめるか、如何にして死に打ち克つか、この問題にふみ入らうとする慾求の弱い人或はまるでない人は、問題を自己まで帰したつて始まらない。私は零になりましたと云ふのと同いだ。

（『六号感想』「白樺」四巻九号・一九一三年九月一日）

「自己を生かす」生活とは、美を探求する生活である。それは、人間、思想、芸術を愛するとともに自分の言葉や感性によって表現することで自分という存在を明確なものにし、認識していくことである。また表現することによって、他人のうちに共鳴し得る自分の要素を認識していくことである。そこで得た認識が自分の生き甲斐に直結し、自分の存在を死に打ち克つ不滅の存在として肯定するに至るのである。こうしてまとめると、「自己を生かす」という「生長」の思想は実篤流のエロスの原理なのかも知れない。

西島は釈迦や邪蘇を例に出し、彼らの人生に「本當の道」を見る。そして「自己を生かす」道を歩くことで「本當の道」に到達できると考える。廣次はこの道を歩こうとしている。戦争にとられる前は画家として、戦地で盲目となり、絵が描けなくなり、自殺まで考えるが、そこから起き上がり、作家として「自己を生かす」道を歩こうとする。廣次の書こうとする作品は反戦思想、国家批判に満ちていた。そして、その第一の援助者であった妹の静子がいなくなっても頑張ろうとする。如何なる障害があっても、それを乗り越え「自己を生かす」道を進み続ける姿勢。それが「本當の道」に入ることである。

廣次の最後の台詞は「俺は力が欲しい」である。後に三井甲之がこの台詞は「金がほしい」にした方がいい、と言及した。しかし、この「力」は金権社会の中で対抗する力ではなく、「本當の道」に入る力である。そして、この力を求める廣次の姿勢に「人の真価」があり、この作品を貫く太い骨になっているのである。

三、作品の構造に就いて

この作品は大きく分けて二つの構造がある。ひとつは「本當の道」に入ろうとしていく廣次の生き方である。この構造については前の第二章で明らかにしてある。そして、もうひとつは渦巻きに例えて考えてみたい。その渦巻きのような構造は、ストーリーを追って加速度を増す不幸の渦巻きに巻き込まれていく構図を持った人物関係である。この章では、第二の構造を明らかにしていきたい。

廣次の持つ元凶を中心に据えた不幸の渦巻きは、この作品に登場する六人を次々と巻き込み、彼らは安定した生活の均衡を失っていくのである。元凶は廣次が戦争で盲目になったことであり、その深層には戦争がある。絵の描けなくなった人生は廣次には無意味に近いものであった。そんな絶望感に打ち拉がれた廣次を支えたのは妹の静子であった。

静子は盲目になった兄の身の回りの世話は勿論のこと、本を読み、文字を書き、廣次の目の代わりを務めるようになる。しかし、廣次が静子に最も感謝しているのは心の支えになってくれたことである。静子は廣次が画家でなくなっても、生きていることを喜び、廣次と一緒に生きていこうとする。そして、廣次と静子は創作という作業を通して、精神的な繋がりをより強くしていき、血の繋がりで以上の連帯を持つのである。このような連帯感があったからこそ、静子は廣次の元凶に巻き込まれるのである。巻き込まれたというよりは、静子は自ら進んで渦に飛び込んだのである。

静子を相川三郎の妻にしようという叔父夫婦の策略によって結果的に兄妹は引き裂かれることになる。廣次はこの策略に抵抗し叔父

の家を出ようとするが、その資金がない。そこで廣次は西島にたすけを求める。

廣次と西島は直接対面する前から作品を通しての知己であった。お互いの作品を評価していたために、西島は初対面の廣次の小説を読み、自分たちの雑誌に出してもよいと考える。静子の結婚話を契機に西島は援助を決めるのであるが、最大の理由は廣次の仕事を完成させることであった。

才能のある仲間を援助したいという気持ちはこの作品の中に限ったことではない。実篤自身も「岸田劉生画会主意書」なるものを書いて、劉生のパトロンを募集したこともある。このような友人関係が西島の人物造形の背景になっていても不思議はない。

静子の結婚話は西島にとって援助の契機であったわけであるが、静子への同情もないわけではない。恋愛の根本には同情（シンパシー）がある。「情」を同じくすること、つまり相手の立場に立って心配し、行動することである。西島は静子の立場にすっかり同情してしまう。更に静子は芳子に言わせれば「かゞやくやうに美しい」女性である。その静子が西島を頼るのである。西島は静子に対しては恋愛感情を認識するようになるが、それは静子の世話を自分だけで済ませたいという旦那的な考えとなる。しかし、決して「妾にしよう」という気持ちではなく、静子に恋する気持ちなのである。結果的に西島の思いは静子に通じることなく終わる。静子から見れば西島は兄の仕事の理解者であり、信頼と感謝の気持ちはあるが、それ以上の好意ではないのである。しかし現実として、西島と芳子の夫婦に暗雲が立ち籠めたことは否めない。以前から部屋に飾ってあった廣次の描いた静子の絵に軽い嫉妬を覚えていた芳子は、静子が西島の

妾であるという噂を耳にしヒステリーを起こす。そうして家庭崩壊の寸前まで状況は進んでいくのである。

『二十一歳の廣次』の中で綾子は廣次の家をよく訪れる女性として登場している。廣次はゆくゆくは綾子と結婚したいと考えていた。しかし、綾子は廣次のライバル的な存在である高峯の妻になってしまふ。そうなっても廣次は綾子への好意は捨て切れない。第三幕で高峯が綾子の裸体画を描いていると聞いて、廣次はびっくりして起きる。それは単に驚いたのではなく、嫉妬の気持ちもあつたに違いない。綾子にしても『二十一歳の廣次』の時制では高峯よりも廣次に好意を持っていたのである。『その妹』の時制では綾子はそのことを打ち消すが、それは綾子が高峯の妻である以上、廣次に対して必要以上に好意を見せることは夫婦関係の破滅を招きかねないからである。

廣次の持つ元凶を中心にした渦巻きは妹の静子を、結婚話を契機に西島を、西島が静子に好意を見せた為芳子を巻き込んでいく。そして、もし廣次と綾子の関係が再燃していたら、高峯と綾子まで巻き込んでいたかも知れなかった。この状況を打開するためには、『十重二十重にとりかこむ災いを一刀両断』するしか方法はなく、その切札を持つのは静子であり、方法は相川三郎の妻になることであつた。静子は自ら死んでみるみたいに生きていく道を選び、それを自殺と規定する。この思い切った行動によって、一見すると渦巻きはなくなり、穏やかな流れが訪れるように見える。しかし、廣次が文筆で成功することが約束されたわけではない。まして心の支えである妹がいなくなることが約束されたわけではない。西島の家庭も完全にもとの状態に戻るとは考えられない。一度静子に恋をしてしまっ

た西島も、一度夫を疑った芳子も、何もなかった昔に平然と戻れるわけではない。また、この位で信頼関係がなくなる夫婦関係にも何か問題があるのかも知れない。そして、何よりもこの渦巻きの中心の深い部分にある元凶、つまり戦争に対する根本的な解決はされず、盲目もそのままである。解決されたのは全て表面上のことである。その深層にあるものは何ひとつ解決されなかったどころか、更に悪化したとさえ言えるのである。

四、『その妹』に至る社会性の変遷

『その妹』に表現されている思想については、第一章と第二章で述べてきた。では、その思想はどのように形成されてきたのか。実篤が過去に一度捨てた社会性を何故再び身につけたのか。この章ではその社会性の変遷を明らかにしながら考えていきたい。

社会性の変遷の区切りは実篤が竹尾房子と結婚した時点にある。結婚の約束をした一九一三年十二月の「白樺」(四卷十二号)の『六号感想』を引用してみる。

自分は独身の時は絶えずある淋しさを感じてゐた。今はその淋しさはまるで感じなくなつた。しかし自分はそれが為に創作力を減じたとは思はない。反つて之からだと思つてゐる。自分は以前にはよく「ある淋しさ」に強いられて創作したのは事実である。しかし自分はその淋しさに卒業したい気が強かつた。卒業すれば新しい世界が開けると思つたのだ。さうして予期通り卒業した。

実篤は結婚する前に三人の女性に恋をする。『第二の母』（後に『初恋』と改題）のお貞こと志茂テイ、『彼の青年時代』のMKこと女中のまき、『お目でたき人』のつること日吉たかの三人である。この三人に実篤は意中を告げることはないが、心の奥底ではいつも女性のことを考え、それが現実にならないことに「ある淋しさ」を感じていたのである。この結婚によって、実篤は「ある淋しさ」から卒業し、新たな創作エネルギーを得る。その中身は後に述べるとして、結婚前の社会性について考えてみたい。

自分は死刑になつてもかまわないと云ふ權威を自分に感じない限り自分は日本に於いて思想の自由を得ないことを知つてゐる、かくて自分は思想の自由を得ん為に死刑になつてもかまわないと云ふ勇氣をつくることに苦心してゐる。

（『自分は弱いから強い』「白樺」三巻四号・一九二二年四月一日）

今の世に思想家として立つてゆくことは非常につらいことである。大きな重荷を負わされるから。

トルストイ主義、社会主義は自分に重荷を負せやう、負せやうとしてゐる。すなほにこの重荷を負はされる時には今の自分のやうに力のないものは動きがとれなくなる。自分は先づその重荷をはらいのけた。

自分は自分の荷ひたいだけの重荷を一つづつ、あらためて荷つてゆきたいと思つてゐる。しかし今の自分は重荷を一つでも荷ぶことを心よしとしてゐない（尤も荷はないことも心よしとはしてゐないけれども）。

（『自分に荷へる重荷』「白樺」四巻六号・一九一三年六月一日）

この二つの小論から分かるように実篤は思想家であるためには、まず社会性を捨てるより仕方がない、と主張する。しかし、社会性を捨てたままで思想家を続けることは不可能である。何故なら人間は社会的な動物であり、一人では生きられないからである。人間は生きていく為の環境を一人で整えることは出来ない。人間が集まって社会を形成している以上、その社会の中でたくさん問題が起こるのは必然のことである。しかし、大逆事件が起こった当時、思想家が自由な言論を唱えるにはあまりにも危険な社会であった。そこで一先ず、実篤は社会性という「重荷をはらいのけ」、政府の最終的な弾圧である「死刑」に対抗できる能力と權威を身に付け、再び「重荷を荷」い、思想の自由を得ようとするのである。

実篤が社会性を身につけることを決心したのは、房子との結婚の後である。結婚によって創作のエネルギーの変化を余儀なくされた実篤は新たな創作のエネルギーに関してこう考える。

自分は社会改良家ではない。しかし、今よりもつと人類の運命をびつたり感じられる生活に入らなければならぬことは感じてゐる。さうして許される限りにおいて人類の運命に自ら交渉してゆきたいと氣もしてゐる。（『自分の今後の道』「白樺」五巻二号・一九一四年二月一日）

実篤は社会改良家つまり實際家の道には進みはしないが、文士として「人類の運命」に交渉する權威を自分に感じ始めたのだろう。

そうして、それから五ヶ月後、「人類の運命」に直接的に関わる戦争が起こる。七月に世界大戦が開戦し、八月二四日には日本が参戦する。それから数週間後の九月一五日、実篤は千家元麿の家で次のような体験をする。文中の「彼」は実篤である。

汽車は早く走つてゐる、少しの間から見える処に汽車の窓はつゞいて頭はれる。どの窓にも等しく兵士の頭が重なり、赤と白の旗が重なり動いてゐる。

「うわー うわー」と云つてゐる。その声は二人の胸に異様にふれた、隣家の女の人々の心にもふれたらしい。一種凄い声だった。死を前にひかへてひきづられてゆく人々の病的な興奮のやうに思へた。彼等は嬉しいのか、悲しいのか、勇ましいのか、淋しいのか、彼にはわからなかつた。たゞ異様な興奮が、等しく彼等をおそつてゐるやうに思へた。〔彼が三十の時〕「白樺」五巻十号・一九一四年十月一日〕

想像力の豊かな実篤にとって、兵士の姿は戦争をしに行く勇ましい戦士ではなく、死を恐れながらも強引に連れていかれる死刑囚のやうに見えたに違いない。戦地に行ったことのない実篤にとっては戦争に行く兵士の悲惨な光景を見たことがかなり強烈な印象であつたと思う。こうして、実篤は反戦思想を着々と実感から深めていくのである。

そして同年十二月三十一日に実篤は『その妹』を執筆し始めるのである。同月に執筆した雑感に次のようなものがある。

たしかに今度の戦争は自分を殺伐にさせた。

個人の生命が国家の前には安価だと云ふことが証明されたから。

〔『今度の戦争』「白樺」六巻一号・一九一五年一月一日〕

「殺伐」という言葉に実篤の怒りの気持ちが表れているように思う。「自己を生かす」ことが実篤にとっては最大の哲学である。それを支える「個人の生命」が「安価」に扱われ、戦争で次々と人が死んでいくのはたまらないことであつたのだろう。ここで反戦をしなかつたら、「自己を生かす」ことを制限され、生命を蹂躪されかねない。時期はもうそこまで来ているのである。以前、捨てた重荷を背負う時が来たのである。その重荷は反戦思想、国家批判である。実篤はこの重荷を背負って歩ける権威を感じ、『その妹』を執筆するのである。

テキスト及び参考文献として、以下の文献を使用した。引用も同じ文献による。

『その妹』「白樺」六巻三号・一九一五年三月一日

『二十一歳の廣次』「文章世界」十一巻一号一九一六年一月一日

『その妹』と『二十一歳の廣次』の二作品はテキストとして初出の雑誌を使用した。他の武者小路実篤の著作については「武者小路實篤全集」（小学館）を使用し、括弧内に初出を並記した。また、年譜は同全集第十八巻を参考にした。

（こみね みちお・一九九二年卒）